

『毎日』にも良識の記者たちがいる

ここ20日ほどに限っても、紙面に、誠実に非戦を語りかける記事は少なくない。たとえば6月29日夕刊「憂楽帳」の氷置恒夫さんの「父の梅」、広岩近広さんの「平和をたずねて」で、毒ガスを製造し中国人民に対して使用した大野久島のことを取材しての「毒ガス島の伝言」(7月11/18日)、7月12日「発信箱」で町田幸彦さんの「核兵器と国の格付け」、7月15日「発信箱」で広岩さんの「非人間性を問う」、連載「A・Bomb」(7月16/18日)、18日の田原由紀雄さんの天台座主・半田孝淳氏への「核心インタビュー」。

「あの戦争の犠牲者が残らなかったものは何か? 僕には、首相の言う「戦後レジームからの脱却」がその答えとは思えない」。―氷置恒夫。

「核兵器を持つと一人前の国になれる」という妄想がうごめく。核保有が国家的自尊心に結びつく時代になれば、核拡散は制御できない。杞憂ではないと思う」。―町田幸彦。

「慰安婦を強制連行したか否かを論じる以前に、日本軍は慰安婦を伴って戦争をした。この事実は紛れもない。どう考えても人権問題であり、女性の尊厳の問題だろう。こうしたことが公然と許されていたのが「国民精神総動員運動」の進められた一五年戦争で、ここには戦争の本質が凝縮されている。・・・この(立命館大学国際)平和ミュージアムは、戦争のもつ非人間性を問い、過去と誠実に向き合おうと呼びかけている」。―広岩近広。

7月18日「A―Bomb・国枝すみれ記者の見たアメリカ」も貴重。30年以上も前に栗原貞子が刻んだ詩「ヒロシマというとき」を思う。アメリカはいまも原爆投下を正当化し、イラクへの先制攻撃戦争と占領継続を正当化し、日本の安倍政権は、南京虐殺はなかったし、真

珠湾奇襲攻撃にはじまる戦争は自衛のための聖戦で、アジア太平洋地域を欧米植民地支配から解放する正義の戦争だったと正当化し、従軍慰安婦にも沖縄県民の集団自決にも軍の強制はなかったと言いつ張る。鉄面皮の暴力信奉者たち。

アメリカで流布された「原爆が救った人命の数」が、使用せずに侵攻すれば2万〜4万6000人と推計、トルーマンは投下後は20万〜25万人と言いだし、引退後は50万人、92年出版の伝記では100万人。

アメリカ世論も、朝鮮戦争時、使用支持、湾岸戦争時、開戦前24%開戦後45%が支持。04年、核兵器全廃に35%が反対、条件付を含めて61%が賛成。05年調査で、日本への原爆投下に65歳以上の6割が賛成、30歳未満の6割が反対。「核不使用」さらには「核廃絶」の「可能性はまだ残っている」と書く国枝記者の煩悶の誠実さは、うれしくもあるが哀しいが。

天台座主・半田孝淳氏の言葉に欣喜雀躍した。「生命ほど大切なものはない。」「不殺生戒」(ふせつしょうかい)は仏教徒が守るべき戒律の第一です。○五年にフランスのリヨンで開かれた祈りの集会以て峠三吉の原爆詩「にんげんをかえせ」を読み上げ核廃絶を訴えたら、同時通訳に耳を傾けていた二〇〇〇人が一斉に立ち上がった。心臓が躍りました」。

公共哲学共働研究所所長の金泰昌(キムテチャン)氏が中国の吉林大学哲学社会学院の哲学系学生との対話で、こう語っているのにも同感だ。

「率直に言いまして、今日の世界にアメリカのような身勝手な国家は一つだけで十分だということですが。アメリカの中の自由と平等と正義を実現するために世界の不自由と不平等と不正義がその代価として強要されているといえる場合が多すぎるのです」。(『公共的良識人』第187号)

『毎日』はやわからかに進行する「国民精神総動員体制」に反撃を。